

---

# 兵士不純31 40

猫離脱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

兵士不純 3140

### 【Nコード】

N2837L

### 【作者名】

猫離脱

### 【あらすじ】

兵士不純 3140

続

31

話が終わると、お前ら自分のことは富田さんと言えともの調子にもどってそう切り出した。大家さんでもいいわ、お前ら行く場所ないんだろ。2階使え。しばらくなら居てもいい。

風呂は風呂屋、飯は飯屋、酒だけはある心配するな。

われわれは留まった。風呂は大正時代に建てられたという贅沢な銭湯が近くに健在だった。

帰りに雨が降り店の番頭さんが傘を貸してくれて二人で並んで帰った。橋を渡る。大きな木造の橋で隙間にはこけが生していた。蛙やらナメクジやらミミズやらと一緒に橋を渡った。

山で雨が降り水かさを増そうとしている川の流れを欄干で眺めながら美緒がさて、といった。田上も同じ気持ちだった。さて。

先手を取られたとうな感じだった。

さて、銭湯に入りながら二人ともおなじ言葉を念じていたのはおかしかった。

雨が傘からも橋からも垂れて草や花からも垂れていた。とりあえず富田さんところにもどろつかと美緒が言った。

死んでたりしないよね。

田上は言いかけたが口にしなかった。

家に着き1階では杜氏がテレビをみて酒を飲んでいた。

美緒がただいまといい背中でおうと答えていた。

2階は息子の部屋だったのだろうか。窓が格子で少し出窓になっており腰掛けて外の風を浴びるのに心地よさそうだった。ここから川の流れを見ることができた。あの橋も遠くに見える。

お酒もらってこようか、それとも2人で下で昔話でもしてる。私お

酒飲めないし。

そもそも、美緒とも杜氏ともどんな繋がりがあるというのか、田上は思い始めた。

天井を見、畳の床を感じ、ちゃぶ台をだし、布団を敷き雨が降り続けとりあえずぼんやりとした窓の外からの明かりがにじみ出してきた眠りについた。

美緒もそうなのだろう。杜氏もそうなのだろう。そう思いながらまどろんだ。

32

日が差し込んでいた。

晴れたった。

天井の面がよく見えた。隅では蜘蛛が2匹眠っていた。

まだ朝は早いはずだった。美緒はなく、下において小便をすまして様子をうかがったが杜氏の姿もなかった。

サンダル履きで外に出た。雨上がりの朝はだれでおそうなのだろうか、誘われる。きつと二人で散歩に出ているのだと思った。水たまりを巧みによけて土の道を歩く。橋のある通りに出るまでは家の周りは舗装されていない。ざりっざりっという自分の足音と光が調和する。雨の臭いと太陽の朝の臭いが混じったすがすがしい朝に感じられた。

橋にでると2人がいた。

美緒が買い物袋を下げ杜氏は杖をついて煙草を吹かしていた。

怠け者に逆戻りかつかえんの、杜氏が言う。

買い物袋の中には卵やら野菜やらが詰まっていた。朝ご飯食べようと美緒が言う。

橋の途中で引き返して戻った。

33

実はな3度仕事を断った。それを釈明にいかねければならん。断るといふのは約束を違えるということも含めてだ。

ワシが帰るまでこの家を頼みたい。

朝ご飯を食べ終わると杜氏はそう言い出した。

昨日の今日でなんでそうなるのだろうとぼんやりと思っていた。

美緒と杜氏は二人で田上を見つめた。

話しはもうついてしまったのだろう。寝坊するとそんだ。

中国のどこですかと言おうとしたがそれはどうでもいいことのように思えた。

まだ朝の7時半だった。

田上は夢を見ていなかったが、ここまでがすべて夢ではないかと疑うのだった。

34

富田さんは今日の夕方にここを発つ。戻らないだろうと思う。死にいくんだらうと思う。ここが故郷だって言っただけなのに。

初はぼんやりしている。なにか感じているようだけどここに来てから覇氣がない。

私は元気だ。外に出てからというものの、あの部屋から出てからというものの調子がよい。

近くの知り合いの農家にただで卵と野菜を分けてもらえる。米はある。酒もある。食べていくには困らない。冬までは。問題は冬だ。それまでに私が戻らなかつたらここを出ろ。そう言った。

初のことには聞かないがよくわかつているようだった。あれが息子にあつたのだらうと聞いてきた。息子は生きている。だが帰れない。帰ってきて、生きていない。

私のつくった卵焼きがおいしかったそうだ。

卵がいいからと言ってごまかしたがうれしかった。

家族のようだった。きつと富田さんもそう思ったに違いない。

35

明日なにするかなんて考えなくていい。朝起きて卵と野菜をもらいに行つて朝ご飯をつくる。お昼は散歩に出て食事をし、帰りにスーパーを巡つて帰ってくる。銭湯に行き夕食を考える。3と7と9のつく日はお酒を飲んでもいい日。

静かで穏やかな日。

初は昔は眠くて眠くてしょうがなかったらしいけどここにきてからはそうはならないという。

しかたないから話をしようとなれこれ話をする。眠くなるまでなのだそうだ。そしていつも寝る。なんだかんだで私より寝付きはいい。

便りはない。

ここの住所、あちらの住所と富田さんにもらった書き置きが部屋の箱の中にしまいっぱなしで眠っている。向こうについたら連絡するといったきり。

初は河原で魚釣り。

橋の架かっている大きな川の他にその川に流れ込む山間の溪流で釣るのだそうだ。

ここのところは朝私より早く起きて釣りに行く。魚を釣つてきてこちそうだと私にうれしそうに渡す。昼は寝ていて夜にまた起きてくる。

お酒の日にはだ。

何が眠くならないだといいたいが趣味としては悪くない。

私は散歩と買い物と料理が趣味になった。

街に出て大きくはない本屋で料理の本を立ち読みする時は時間帯が大事だ。学生の帰りの時間にあわせる。ある程度混雑していないと目立つ。

月が出た。

月がでると初は喜ぶ。

橋に行こうと私を誘い外に出る。

ほろ酔いで、橋から下を上を眺めたりする。そして私の臭いをかいだり一緒に寄り添って歩く。

36

杜氏の残してくれた酒は最高だと思う。田上はここにきて生き物を見ていると思った。天井に巣くう蜘蛛、歩く蟻。雨の日の蛙、みみず、ナメクジ。晴れの日の蝶。

日が差す部屋は心地よい。開いた一升瓶の口に止まる蝶。酔っぱらいはしないだろうか。

自分が山から降りた訳。山に残らなかった訳。この為だといったかった。

美緒がやってくる。朝だ。わかっている。起きている。

生き物を見ている。魚を鳥を虫を見ている。風を感じている。光を見ている。雨を雲を空を見ている。

食事を取る。ゆっくり取る。

そして田上は部屋で窓からさす光を見て夕方まで過ごすのもいいし外へでて自然の中でやはり生物をみるのもいいと一日の時間を思うのだった。

37

夜、真夜中なのだろう。隣で初が布団を起こした。月の光がまぶしかったからではない。起きた手にその光がかかっていた。動かなかった。私は横になったままそれを見ていた。手が白く月明かりに照らされていていつもなら思うことを思わなかった。

美しいとも不思議ともなぜか思わなかった。来るものが来たのだと

わかっていたのだろうか。  
その週に家に手紙が来た。

富田康史から田上初、美緒へだった。

38

無事中国に着きました。私は元気です。目的をもうすぐ果たせそうです。お土産をもって戻るのを楽しみにしてください。

中国のどこにいったのか聞くべきだった。いま、ようやくたどりつく手紙なのだろうか。私はそう思った。

初はなにか別のことを考えているようだった。

この前の夜、なにか見たのを聞きたかった。久しぶりに夢をみたのだろうと思った。

何の夢、どんな夢。

39

老人を、杜氏がどうかはわからないが老人をあいつが、杜氏の息子が連れていた。

山道を登っていた。ゆっくりと連れだって。先は崖で道は崖に通じている。息子が先に崖の先に歩みを進める。その後を老人が続く。前を見ていないのか続く。息子は宙に浮いている。崖に落ちないで空に上がってゆく。老人は歩けない。落ちて消えた。

40

味が変わったのか舌が変わったのかその日の酒は水のようにできなかった。手紙に差出人の住所はなかった。杜氏が行き先と告げて書き残した中国の住所が家にはあった。

連絡すべきか迷っていた。ここにきて迷ったのは初めてだった。



美緒に相談した。

でも、言葉どおりとるべきだと二人の結論だった。  
すこし様子をみればまた便りがあるだろう。

一応って感じで思いだしたように書いたんだろうと。

でも、だが、言いはしたが話しはしたが全然そうじゃなかった。全然二人ともそう思っていないのだ。一人ひとりはそのうじゃないと思いつつ、相談すると違う答えをだす。その答えにやはりひとり一人違うと思いつつも違う答えが正しいと思ひこむ。

わかっている。わかっている。

われわれは富田康史になにかあったとわかっているのだ。

続

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2837l/>

---

兵士不純31 40

2011年1月28日08時10分発行